

様 式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書



平成 30 年 6 月 13 日現在

機関番号：11601

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K16770

研究課題名(和文) 削除に課せられる形態・統語的同一性条件の理論的・実証的研究

研究課題名(英文) A Theoretical and Empirical Study on Morphosyntactic Identity Condition on Ellipsis

研究代表者

佐藤 元樹 (SATO, Motoki)

福島大学・人間発達文化学類・准教授

研究者番号：00737942

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000 円

研究成果の概要(和文)：本研究では、動詞形態素の観点から、省略に課せられる形態・統語的同一性条件の帰結について追究した。削除が形態・統語的同一性条件に従うのであれば、動詞形態素がT主要部に生起することから、動詞句省略では動詞形態素の不一致が許され、節削除では動詞形態素の不一致が許されないことが予測される。

本研究では、この予測は動詞句省略についてのみ支持され、動詞及び動詞のコピーは動詞句省略においてのみ形態的同一性が要求されることを示した。一方、節削除は、動詞形態素の形態統語的同一性が必要とされず、意味の同一性に基づいた焦点条件に従うことが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：This study explores the consequences of morphosyntactic identity condition on ellipsis in the domain of verbal morphology. Purely morphosyntactic approaches to elliptical identity predict that VP-ellipsis permits morphological mismatch, but clausal ellipsis does not, because only the clausal ellipsis deletes the TP, including the morphological features on the T head.

This study showed that this prediction was partially borne out, and that English verbs and their copies require morphological identity under VP-ellipsis but not under clausal ellipsis. It was shown that clausal ellipsis is subject to the focus condition that states the elided material is semantically identical to some antecedent.

研究分野：英語学

キーワード：生成文法 省略現象 動詞句省略 疑問縮約 同一性

## 1. 研究開始当初の背景

省略現象は、節や句が音あるいは文字で表されないにもかかわらず、その意味が解釈される現象であり、言語のインターフェースに重点を置く近年の生成文法の極小主義プログラムの枠組みにおいて、盛んに研究されている研究分野である。

これまで約 60 年に渡る生成文法理論にもとづく言語研究によって、省略文の空所には、統語的内部構造が存在することが徐々に明らかにされてきた。特に、Merchant (2001)の研究以降、省略文の外的・内的統語構造が明らかになるにつれて、省略文の空所は、構造上、元々空であったのではなく、統語派生のある段階で、構成素が削除されることによって生じたものであるという考え方が標準的となった。近年では、音韻部門(Phonetic Form)における削除分析(PF 削除分析)が有力な仮説とされている。例えば、PF 削除分析に基づく、以下に示す動詞句省略は、完全な文から動詞 sleep を削除することによって派生される(以降、省略部は取り消し線で示す)。

- (1) John slept, and Mary will [VP ~~sleep~~] too.

PF 削除は、文脈から意味が復元可能であれば、常に適用できるわけではなく、省略文と先行文の間で何らかの同一性が満たされている必要がある。この削除に課せられる同一性条件の解明は、近年の省略現象の研究における焦点となっている。これまで削除の同一性条件については、意味的同一性条件と形態・統語的同一性条件が提案されたが、PF 削除が形態・統語的な情報に感応的であるかどうかは未だに結論が出ていない。

例えば、一般動詞の省略と be 動詞の省略では、動詞形態素の同一性に関して対比があることが観察されている。一般動詞の動詞句省略は、(1)で見たように、過去形 slept を先行詞として、原形 sleep を省略することが可能であるが、be 動詞を省略する場合は、過去形 was を先行詞として、原形 be を省略することが許されない。

- (2) \* John was a good teacher, and Mary will [VP ~~be a good teacher~~] too.

このように、動詞句省略は、同じ動詞を用いたとしても、必ずしも許されるわけではなく、どの程度の形態・統語的な同一性が必要であるのかははっきりとしていない。

本研究では、このような研究背景のもと、削除における同一性の問題に対して、動詞形態素の観点から体系的な研究を行い、形態・統語的同一性条件の解明に貢献することを目的とする。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、動詞形態素の観点から、削除に課せられる形態・統語的同一性条件の解明に貢献することである。

現在の省略現象に関する理論に基づく、削除が動詞形態素の形態・統語的同一性条件に従うのであれば、動詞形態素が構造上具現化する機能範疇 T を境に、以下の二つが予測される。

- (3) [CP C [TP DP<sub>subject</sub> T [VP V DP<sub>object</sub> ]]]

### a. 動詞句省略 (VP-Ellipsis)

動詞句削除は、動詞形態素 T をその省略箇所に含まないため、動詞形態素の不一致が許される。

### b. 節省略 (TP-Ellipsis)

節削除は、動詞形態素 T をその省略箇所を含むため、動詞形態素の一致が求められる。

本研究では、動詞形態素が具現化される動詞自体だけでなく、動詞の主要部移動によって生じたコピー(痕跡)も対象に、上記の予測を検証し、削除に課せられる同一性条件の解明を目指す。

## 3. 研究の方法

本研究では、動詞形態素の形態・統語的情報(節の定性・時制・素性)が削除に感応的であるかどうかを検証するために、(2)の例で示したように、強い形態的同一性が観察されている be 動詞を用いた。具体的な研究手順は以下の通りである。

はじめに、be 動詞の統語特性や be 動詞の省略文の基礎研究を行い、省略文の外的・内的統語構造を精緻化した。本研究で扱った be 動詞の省略現象は、be 動詞の動詞句省略(4a)、be 動詞残留型省略文(4b)、be 動詞の比較削除構文(4c)である。

- (4) a. John will be a good teacher and Mary will, too.  
b. John is a good teacher and Mary is, too.  
c. John is more honest than Bill is.

次に、基礎研究で得られた省略箇所の統語構造や be 動詞の諸特性をもとに、(3)の予測を検証した。

## 4. 研究成果

(3)の予測を検証した結果、動詞句省略では予測が支持され、その帰結として、動詞句省略では動詞形態素の形態・統語的同一性が必要であることが得られた。一方、節省略では予測が支持されず、節省略には動詞形態素の形態・統語的同一性が重要ではないことが示された。

更なる研究の結果、節削除は、焦点化に基づく意味的な同一性条件に従っていることが示された。本研究によって得られた具体的な成果は以下の通りである。

動詞句省略における動詞形態素の同一性条件を検証するために、削除において強い形態・統語的同一性が求められる be 動詞を用いた省略文について、外的・内的統語構造を調査した。

(5) John is a good teacher and Mary is too.

(5)の省略文は、一見すると be 動詞の補語だけが省略されているように見えるが、be 動詞は助動詞と同様の構造的な位置（機能範疇 I の主要部）を占めることができるため、以下のように、動詞句が省略されている可能性も考えられる。

(6) John is a good teacher and Mary is [<sub>VP</sub> ~~t<sub>is</sub> a good teacher~~] too.

研究の結果、(5)のような be 動詞残留型省略文では、省略部の解釈に述語だけでなく、副詞などの修飾語が含まれることから、名詞や形容詞などの述部のみを対象とした省略ではなく、動詞句を対象とした省略であることが明らかになった。

取り残された be 動詞は、非定形であっても、動詞句外部に主要部移動をし、be 動詞のコピーを含む句が削除される。しかし、be 動詞の中でも、一般動詞と同様の性質を示す being は、動詞句外部に主要部移動することができないため、(7)に示すように、being の補部を省略することができない。

(7) \*John is being a good teacher, and Mary is being.

このように、be 動詞残留型の省略文の可否は、be 動詞の主要部移動の有無によって説明される。

本研究では、の基礎研究で得られた be 動詞省略文の統語構造にもとづいて、動詞句省略に課せられる動詞形態素の同一性条件を検証した。be 動詞の削除は、先行研究で指摘されているように、be 動詞自体の削除には強い形態・統語的同一性が要求される。

本研究においても、先行研究で指摘されている効果を確認することができたが、(8)のように、be 動詞自体ではなく、be 動詞のコピーを含む動詞句が削除される省略現象では、強い形態・統語的同一性が観察されないことが示された。

(8) John is [<sub>VP</sub> t<sub>is</sub> a good teacher] and Mary will be [<sub>VP</sub> ~~t<sub>be</sub> a good teacher~~], too.

この事実は、be 動詞も一般動詞と同様に原形で統語派生に導入され、後に動詞形態素と結合する必要があることを示唆している。したがって、動詞句省略では、動詞と動詞の移動によって生じたコピーには、先行文と省略文の間で形態・統語的同一性が必要であると結論づけられる。

(9) John is<sub>(be+3sg)</sub> [<sub>VP</sub> t<sub>be</sub> a good teacher] and Mary will be [<sub>VP</sub> ~~t<sub>be</sub> a good teacher~~], too.

be 動詞のコピーを含む句だけが削除される場合、動詞の語彙的意味に関しても同一でなければならない。このことは、be 動詞と同様に助動詞的振る舞いを示すイギリス英語の have から示される。以下に示すように、省略文と先行文において、語彙的意味が異なる動詞が用いられている場合、be 動詞の述部の省略は許されない。

(10) A: Have you a good dentist?  
B: \*Yes, my cousin is.

(10)に示す be 動詞残留型省略文が許されないことは、省略されている句が名詞句( a good dentist )ではなく、be 動詞のコピーを含んだ動詞句 ( t<sub>is</sub> a good dentist )であることを支持するさらなる根拠である。

(11) A: Have you [<sub>VP</sub> t<sub>have</sub> a good dentist]?  
B: \*Yes, my cousin is [<sub>VP</sub> ~~t<sub>is</sub> a good dentist~~].

be 動詞残留型省略文の研究を拡張し、be 動詞の比較構文の研究を行った。研究の結果、be 動詞の比較構文は比較演算子の移動のみによって空所が生成される統語派生（通常の比較削除構文）と、演算子移動に加えて動詞句省略によって空所が生成される統語派生の2つがあることが明らかになった。

(12) a. 比較削除（演算子移動）  
John is taller than [<sub>CP</sub> Op [<sub>TP</sub> Mary is [<sub>VP</sub> t<sub>is</sub> t<sub>Op</sub>]]].

b. 動詞句省略（演算子移動+動詞句省略）  
John is taller than [<sub>CP</sub> Op [<sub>TP</sub> Mary is [<sub>VP</sub> ~~t<sub>is</sub> t<sub>Op</sub>~~]]].

この成果は研究発表 および論文 として発表している。

be 動詞の比較構文は、動詞句省略が適用されたとしても、適用されなかったとしても、表面上は同じ表示の文が出来上がるが、空所の解釈から、削除操作（動詞句省略）が適用された効果が観察される。本研究で発見されたこの新たな事実は、削除操作が全く音声内容を持たない要素に対しても適用可能である

ことを示唆しており、削除の適用条件についても新たな視点を与えた。この成果は研究発表 および論文 として発表している。

比較節内の動詞句省略は、他の節の動詞句省略とは異なり、省略箇所解釈は文脈上自由ではなく、省略箇所に最も「近い」ものがその先行詞となる。この空所の解釈に関する局所性は、比較節内部の演算子移動によって説明される。

削除に課せられる同一性条件の観点から見た場合、比較演算子のコピーは削除操作を受けても常に解釈可能な要素であると考えられる。この成果は論文 として発表した。

節削除における動詞形態素の同一性条件を検証するために、動詞句省略と同様に be 動詞を用いて調査した。

調査の結果、以下のように、節削除では be 動詞に限らず、先行文と省略文の間で動詞形態素の形態的不一致が許されることが示された。

- (13) a. [TP I'll fix the car] if you tell me how  
[TP ~~to fix the car~~].  
b. [TP Being happy] is easy if you know  
how [TP ~~to be happy~~].

この結果は、(3)に示した削除の形態統語的同一性条件に基づく予測に反するものである。

節削除が削除の形態・統語的同一性条件に従わない理由については、残された問題であるが、本研究では、節削除には残余句の焦点（または前提）に基づく意味の同一性条件が課せられていることが明らかになった。

Martin-Gonzalez (2016)は、同じ先行文であっても、how と why の省略文では省略部の解釈が異なることを指摘している。

- (14) Speaker A: He couldn't do it.  
Speaker B: Does he know how [TP ~~to do it~~]?  
(15) Speaker A: He couldn't do it.  
Speaker B: Does he know why [TP ~~he couldn't do it~~]?

(14)に示されるように、how を用いた疑問縮約では、省略部の解釈に先行文の法助動詞 could と否定 not の解釈が含まれないが、why を用いた疑問縮約では、その二つの語が省略部の解釈に還元される。このような違いが生じる理由は、省略文で取り残される句（残余句）の焦点や前提の違いから説明される。how は行為のみを前提とし、why は出来事そのものを前提とした疑問表現である。したがって、疑問縮約では、節や文同士の同一性ではなく、疑問詞の焦点や前提にもとづいた意味的同一性が要求される。

#### <引用文献>

Martin-Gonzalez, "Case and Remnants in Sluicing," *The Linguistic Review*, Vol.33, 2016, pp.531-577.

Merchant, Jason, *The Syntax of Silence*, 2001, Oxford: Oxford University Press.

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計3件）

佐藤 元樹, be 動詞の比較削除構文について、*JELS*、査読なし、Vol. 34、2017、pp.165-171.

佐藤 元樹, 省略現象における削除操作と削除の適用条件について、日本英文学会東北支部第70回大会 Proceedings、査読なし、2016、pp.178-179

Sato, Motoki, String-Vacuous VP-Ellipsis in Comparative Clauses, *Explorations in English Linguistics*、査読あり、Vol.29、2015、pp.129-153.

〔学会発表〕（計2件）

佐藤 元樹, be 動詞の比較削除構文について、日本英語学会第34回大会、2016年11月12日、金沢大学

佐藤 元樹, 省略現象における削除操作と削除の適用条件について、日本英文学会東北支部第70回大会、2015年11月8日、宮城学院女子大学

#### 6. 研究組織

(1)研究代表者

佐藤 元樹 (SATO, Motoki)  
福島大学・人間発達文化学類・准教授  
研究者番号：00737942